

会議名	日本畜産学会 第 109 回大会 ( 栄養・飼養 分野 )
開催日時	平成 20 年 3 月 27 日 ( 木 ) 9:00 ~ 29 日 ( 土 ) 16:00
開催場所	常磐大学 ( 水戸市見和 1 丁目 430 - 1 )
主催者	大会会長 小杉山 基昭 ( 茨城大学 )
参加人数(概数)	約千 5 百名 ( 推定 )
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>本大会では 3 日間にわたり一般講演、総会など恒例行事のほか学会主催シンポジウム、大会企画シンポジウム、公開講演会、ランチョンセミナー、若手企画シンポジウム、15 の関連学会・研究集会も開かれた。この中から栄養・飼養分野および関連研究会等において収集した情報から、地域活性化のための畜産技術研究開発課題関連のものについて報告する。</p> <p>【日畜 109 回大会】; 一般講演は ( 優秀発表賞応募も含み ) 12 会場で 4 5 7 課題が報告された。分野別では、栄養・飼養 ( 約 27% ) 以下、畜産物利用、形態・生理、繁殖・生殖工学、管理・環境、育種、遺伝と続き、畜産技術に対する時代的なニーズを反映していた。</p> <p>栄養・飼養分野には飼料関連の課題のほか、飼養成績に関連する畜産物の品質・性状については畜産物利用分野にも報告されていた。現在のわが国の重要課題である飼料自給率向上に関わる食品リサイクル飼料や自給飼料の利用、新規飼料資源の評価と利用技術開発を目的とした、醸造粕類、トウモロコシ等を原料としたガソリン代替エタノール蒸留粕 ( D D G S )、飼料米、茶殻、農産加工副産物、粗飼料源の評価・サイレージとしての利用法・機能性評価、飼料添加物などについて牛を対象とした 30 課題ほどのほか、ブタ、鶏を対象とした課題も報告された。</p> <p>乳牛の飼養に関連しては、泌乳前期飼料の蛋白レベル、バイパス大豆粕、放牧牛への併給飼料、代用乳などについて報告された。肉用牛の飼養では、黒毛和牛の集団哺育、各種給与飼料の産肉性への影響、稲発酵粗飼料の評価、放牧牛の飼養などについて報告された。また、抗生物質代替やルーメンからのメタン発生抑制を目的とした飼料の機能性評価についての報告も見られた。さらに、馬、豚、鶏の飼養に関連する報告も例年になく多かった。</p> <p>畜産物利用分野に報告された栄養・飼養の畜産物への影響に関するものとして、アミノ酸などによる鶏肉や豚肉の物性や呈味の制御、養鶏飼料としての飼料米、エコフィード給与の豚肉質への影響、トウモロコシサイレージ、生米ぬか、稲発酵粗飼料の給与および放牧仕上げが牛肉質に及ぼす影響などについて報告された。</p> <p>【ランチョンセミナー】; 「海外における畜産 IT 化の現状と S・T 社のソリューション」: 同社の扱う異分野も含む RFID ( 無線による個体識別 ) 関連の事業展開が紹介された。畜産分野については、すでに畜産技術協会の機関誌「畜産技術」に連載で紹介されている程度の情報であるが、普及実用化についてはオーストラリア、ニュージーランド、カナダで進展している状況が紹介された。質問に答えて、日本において実用化が遅れている理由としてはコストの問題があるとのことであった。S・T 社には日本支社と契約代理店もある。</p> <p>【第 69 回飼料懇談会】; 「抗生物質に依存しない減投薬飼養管理システム」: 4 題の話題提供があり、国内外の状況や養豚経営への影響などが報告された。</p> <p>【第 36 回ルーメン研究会】; 「ルーメン発酵を考慮したとうもろこしサイレージの高度利用技術とその普及」をテーマとしてシンポジウムが行われ、北海道プロジェクト研究成果の、乳牛における収穫時破碎とうもろこしサイレージ利用関連 4 課題の話題提供と総合討論が行われた。破碎処理には一定の効果が認められるが、乳質と併給飼料に課題が残り、輸入とうもろこし高騰対策としては関連する諸要因も考慮したいいくつかの技術戦略シナリオの構築が必要とされた。</p> <p>飼料自給率向上の基礎となるリサイクル飼料資源をエコフィードなどとして新規に流通させるためには、飼料価値の評価と安全性の検討が不可欠であり、そのために行われた試験研究成績が本大会にも数多く報告された。これらの情報を基に公的な評価が行われ、畜産現場と畜産物の消費者に資料として示されることになる。これらの飼料は多種多様であり、牧草・飼料作物については言うまでも無く、例え</p>

<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>ば DDGS では、同一原料であっても製法や物流の条件によって栄養価や含有微量成分は一定ではない。今後、異業種、異分野からの新規参入などによってますます多様化して供給されるエコフィード飼料などに関連して、多くの問題も発生することが予想される。</p> <p>これら飼料についての情報の透明化を図り、評価費用の重複を避けるため、国内で供給されるすべての飼料価値と安全性に関する情報を一元的にデータベース化した、製造・流通・飼料給与・生産物の消費者への供給までの各段階で活用できる公開された飼料情報システムの構築が必要と考えられる。当然ながらこのシステムは国内対応に限らず国際協力へと発展し、飼料情報システム運営事業主体の収益事業とすることも可能であろう。</p> <p>第 36 回ルーメン研究会のシンポジウムが“とうもろこしサイレージの高度利用”をテーマとして開催された。このテーマはわが国の栄養・飼料研究において半世紀も前から掲げられていたものであり、今更ながらの感もある。しかし、飼料自給率の向上を家畜、牛の側から低未利用資源の活用によって図るためには、ルーメン問題の研究開発は避けて通れない。近年、この分野の研究者、本学会での発表課題数も少なくなっているが、ニュートリゲノミクスのような新しい手法も導入した重点研究分野として取り上げられるべきであろう。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>畜産物利用の分野に、現行の評価基準を見直す基礎となる研究成績が多数報告された。畜産物に対する消費者の関心が高まっている現在、各種畜産物の流通規格を見直すための研究も重要と考えられる。</p> <p>ダチョウの粗飼料消化率、肥育アヒル肉、野生イノシシ肉、捕獲エゾシカの飼育直しとその肉についての報告があった。本大会への報告課題の対象家畜の多くは牛であるが、わが国の畜産業、畜産学の対象家畜の多様性を図ることも重要と考えられ、特用家畜についての研究の灯火を消さないような配慮、努力も必要であろう。</p> <p>「BSE 特定危険部位の行方と油脂中不溶性不純物の含量」が報告された。我が国で発生した BSE の原因とされる異状プリオンの伝達経路については幾つかの仮説があげられている。その中の一つは飼料中に混入した肉骨粉であり、一つは子牛に与えられた代用乳に添加された動物性油脂とされている。この報告は国内実態の現地調査と室内実験によるもので、これらの仮説を検証あるいは検討するための貴重な情報であり、わが国における畜産関連 B S E 問題の根本的解決を図るために重要な知見と考えられる。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>我が国の畜産、畜産技術は転換期にあり、畜産学も研究組織も急速に変貌しつつあるように思われる。このような時代に畜産現場に必要な技術開発について、先を読み、公正、適切に課題を選択して行くことは容易なことではなく、小さな組織や事業では到底対応できるものではない。科研費など競争的資金の配分について例えば日本学術振興会などには、公平で公正な審査・評価を行うための大規模なシステムが構築されている。畜産関連についても、資金投入の基本的理念の確立と共に、人材を揃えた一元的、専門的な組織的対応が必要な時代に来ている。</p>
<p>5. 会議の所感</p>	<p>今大会では 3 日間開催の中一日が関連学会・研究集会の開催に譲られ、多彩な研究集会が開催された。今回の試みは畜産関連学会の将来方向を考えても適切な対応と評価されよう。しかし、一般講演はかなり圧縮され、発表課題数の多い栄養・飼養分野は 3 会場で同時進行となり情報収集に難儀した。このスタイルで大会を開催して行くとすれば、発表数が多い分野は事前審査を行って会場での討議が必要なものの以外はポスター発表の場を設けるなどの配慮も必要であろう。それよりもさらに踏み込んだ対応の検討も必要と感じさせられた。</p> <p>通常総会の議題として学会英文誌について、電子体を残して冊子体の刊行を廃止することが提案され、異議なく満場一致で承認された。出版に対する科学研究補助金が止まったこと、会費収入の限界などによる学会財政の赤字化が直接の理由とのことであるが、ここにも時代の流れを感じさせられた。</p>
<p>報告者</p>	<p>針生程吉</p>